

テーマ「グリーン・ツーリズムの多様性」

□ 今の時代にこそ必要な GT

【都市と農村との交流…】【自然や農村地域での宿泊滞在…】【環境にやさしい…】 等等定義で強調される内容にも幾多すばらしいものがあります。グリーン・ツーリズムという言葉は輸入の際に、我が国風に工夫されて使用されているようですが、欧州の休暇や観光や地理などの様々な生活文化まで垣間見ると、大変幅の広い解釈もでき、素晴らしい可能性=多様性を秘めた言葉でもあります。

□ 戸惑い迷うこと

多くの研究者の方々が、定義の多数に戸惑い G・T の研究そのものを、諦めておられるとも思えるのですが、これも「可能性=多様性」に富んでいることからではないかと思はれます。内容や項目や範囲に際限がなく、そのために不明瞭で理解し難いとも受け取られるのでしょう。

□ 定義からの解放

私は「自然の中へ・農村への…訪問・宿泊・滞在等での憩い・体験・交流での旅行が齎す生活・文化・産業・経済・社会・環境などへの効果など」かなりの項目の拡散、そしてその効果が頻発・多発することなどから、当面は、「自由に多様に理解/解釈すれば良い」と考えています。

加えて自然や農村に関連する情報や知識・学科を総合的に学ぶこともこの研究には必要で、定義に拘り過ぎて範囲を狭めると発展の可能性を見出し得ません。その解決策として「ism」を超えて「culture」に至ればすばらしいものになるのではないかと考えています。

□ 発展・進化の後に定義を考えよう

さて、ここに至ると、もう、グリーンツーリズムではなくなる、とも思はれますが、可能性を拡げ、多様な発展/進化を遂げる、その過程で効果/成果を上げ、目的や理念を確立していく、その後は、我が国民に「優れた文化だ」と感じられるようになると思います。

※そうならば、国民にも、積極的に学び/体験してみようとする姿勢が観えて来るような

気がします。

※（想像の根拠） 藤原先生「国家の品格」から…後述

まずは、「グリーンツーリズム」というのは、「その全容はソフトに、生活や人生を、楽しくして、肉体的にも精神的にも健康にも良く、社会・地理では、地域や環境にも貢献できる、すばらしい内容のものであること。」このことを、多くの人々が理解・認識することではないかと思はれます。

□ 現 状

これまで、 農村側のこの言葉の理解は 目的＝農村の活性化 目標＝経済的欲望達成 手段＝都市と農村の交流 ということでした。（張り切って望んでいる姿勢が観られます。）

それに対して、都市側のこの言葉の解釈/理解/意味は、「自然や田舎へ行って休養したり体験を楽しんだりする。」というレジャーに近い意味で理解されています。（努力して必ずやらなければならない目的 目標 手段 などではなく、大袈裟で強力なものでもありません。）

定義多数の原因はこの温度差が随所に現れて、趣旨の違いから生じた、混迷ではないかとも考えられ、国民的理解不足や拡がりが遅いなどの大きな原因になっているとも思えるのです。

□ 啓蒙発展の方法

さて、私たちの研究会は、都市側の論理に軸足を置き、その立場に立って、定義や理念を考え、この「主義」を「文化」にまで発展させることができたなら…と、願っております。その方法は、研究者自らが先ずは「文化」にまで高め、そして研究者が指導者を務めれば、この文化の理解と発展を容易にできる・・・と思えるからです。

□ 正確な言葉の意味の理解から

【主義】

○ これではなければいけないと思って、堅く守る考え方。 常に守られる方針。

【文化】

○ その人間集団の構成員に共通の価値観を反映した、物心両面にわたる活動の様式（の

総体)。また、それによって創り出されたもの。

- (狭義) 生産活動と必ずしも直結しない形で真善美を追求したり獲得した知恵・知識を伝達したり人の心に感動を与えたりする高度の精神活動、すなわち学問・芸術・宗教・教育・出版などの領域について言う。この場合 精神文化とも言う。

□ 「主義」から「文化」へ誰かが…

日本国民はその歴史の中で、優れた文化について、「教え導く」という習慣があり、茶道 柔道 華道など「道」の付く「文化」が沢山あり、精神に到るまで高め極めて来ました。藤原先生のご本での【道＝文化】は、我々も十分納得理解できることであります。「グリーン・ツーリズム」も発展/進化させて、「グリーン・カルチャー」に…して学ぶ、これまでに、お話していることも、ご理解頂けるかと思えます。

この分野は、大学での学科や研究等の月日も浅く、新規の研究者が参入し易いところのような気がします。欧州の模倣では、我が国の事情は欧州先進地とは異なり差があり過ぎ、社会成熟度、法整備の遅延なども多く、行政施策の努力をもってしても身動きが儘なりません。今後、「文殊の知恵」が必要です。会員の皆様相互のお知恵を交流させてご研究下さい。よろしく願い申し上げます。現時点ではこの文化の発展は、過信ではなく、さいたえん G・T 研究会のみなさまの双肩にかかっているのかも知れません。多数の人員で幅広く研究することから、近い将来興味ある趣旨や定義が観えてくるかとも思えます。

まずは、会員のみなさん全員が、いろいろな角度から、この文化について思考し、ご自身のすばらしいオリジナルの「テーマ」について、楽しく、多くの人々に、プレゼンできるように、これからの数年、調査/研究に励み、工夫/研究して貰えたらと思っています。後日、必ず、有意義なすばらしい人生を謳歌されることになるでしょう。

2012 年元旦

ペンネーム

農 望 世 間